

水深423mの日本一深い田沢湖をはじめ、連なる山々、清流等自然環境に恵まれた西木村。暗くなりがちな過疎町村の中で、住民が積極的にリードして地域おこしを実践するそのスタイルは、国内各地域からも注目を集めています。

## 積極的な住民活動がリードする地域おこし（西木村）

全国有数の規模を誇る

「カタクリ」自生地

西木村のこれからの季節といえば、カタクリの花が開花の最盛期を迎えます。カタクリは雪解けとともに咲く花で、山間に春を告げる花として、地元では「カタッコ」「カタンコ」と呼ばれるユリ科の多年草です。

村内で最も大きいカタクリの群落は、村特産の日本一大きい「西明寺栗」を栽培する園内に自生しているもので、その規模は20haにもおよび、全国有数の規模を誇る自生地として知られています。

カタクリは、発芽から開花まで8年もの歳月を要することから、地元では、この大切な自然を保護するとともに、一般の人々にもこの自然に触れる機会を持つてもらおうと、

地元住民らで「保存会」を組織し、管理や整備を行う栗園を開放しています。

村でも、このカタクリの群生地を貴重な観光交流資源と捉え、道路や駐車場、トイレ、東屋など周辺の施設整備に取り組んできました。昨年は全国から2万8千人を超える観光客が訪れています。

カタクリの見頃はちょうどこの4月中旬から下旬にかけて。今年も紅紫色の可憐な花で訪れる人を優しく迎えられることでしょう。

本県の「グリーン・ツーリズム」の草分け的存在

農山漁村に滞在し、その土地の自然や文化に触れたり、農作業などの体験を楽しんだりする旅の形態として「グリーン・ツーリズム」が脚光を浴びています。この宿泊の拠

広大な栗園内に群生するカタクリ。花がつくと一帯は紅紫色に染まります。写真中央は珍しい白い花。（写真提供：西木村）



点施設となるのが「農家民宿」と呼ばれるものです。

現在、県内では4町村（昭和町・鳥海町・田沢湖町・西木村）で5軒の農家民宿が営業を行っています。そのうちの2軒は西木村にあり、「泰山堂」「星雪館」、いずれも農家の女性が経営しています。特に藤井けい子さんが平成8年に自宅敷地内にオープンさせた農家体験館「泰山堂」は、本県の農家民宿の第1号で、草分け的存在です。

農家民宿を始めるきっかけとなったのは、村が企画した首都圏の中学・高校生の農業体験受け入れ、都会に住む



農業者組織によりこの4月より営業を開始する「むらっこ物産館」。新鮮な食材を提供します。

子どもたちに「農村の暮らしを味わいながらゆつくり過ごしてもらいたい」という気持ちからです。今では子ども連れの家族やご年配の夫婦、学生グループ、海外からの旅行者など訪れる人は様々、一日一組5名までで年中受け入れを行っています。また、平成11年から予算に合わせ、部屋と料理を提供する「農家レストラン」もはじめました。地場産の新鮮な野菜や山菜をふんだんに使った料理が人気となっています。

村でも、早くから地域おこし事業の一環として「グリーン・ツーリズム」を推進し、修学旅行生の受け入れや、農林業の体験学習など様々な取り組みを行ってきた。現在はこの「農家民宿」と5軒の農家による「農家民泊」の受け入れ体制を整えています。また、新たな試みとして農産物直売施設「むらっこ物産館」をこの4月にオープンします。村が山村振興事業を活用し建設した施設を、泰山堂の藤井けい子さんを代表とする農業者で組織した「むらっこ会」が管理運営を担う。同村が県内随一の山菜・キノコ等食材の宝庫であること、

また、多くの観光客を集める「たっこ像」がある田沢湖畔の湯尻地区という立地条件から、賑わいが大いに期待されています。

### 地域づくり団体が実現させた「本の家」

西木村は、作家の西木止明、浅利佳一郎両氏の出身地、故渡辺喜恵子さんの出生地と著名な作家を輩出していますが、村内には図書館や書店が無く、公民館の図書室に僅かな本があるだけで、子供たちが読みたいような児童書などは当然揃っていませんでした。

そこで子供たちに良質な本を提供し、住民にも必要な情報源として活用できる図書館を手作りを進めてみよう。平成10年2月、西木村の青年グループ「サラダハウス」（門脇光浩代表・村職員）が、インターネット等を活用し古本の提供を呼びかけました。この活動は全国紙等に取り上げられるなど、すぐに大きな反響を呼び、国内はもちろん海外から送付してくる方もいて、善意により集まった図書は呼びかけてから僅か一ヶ月で約30万冊に達しました。



サラダハウスのメンバーは住民ボランティアの協力を得て夜を徹しての図書の分類整理を行い、6万冊余りを処理。内陸縦貫鉄道の駅や、小中学校、温泉施設「クリオン」、喫茶店、病院、歯科医院、寺、交番など、35の村内外の分館に振り分けました。

しかし、一箇所あたりの蔵書数は決して多くはなく、「もっとたくさんの本を読みたい」という声に応えるために、中核施設の設定を検討していたところ、村が協力し遊休施設となっていた除雪基地「克雪管理センター」の2階を提供することになりました。こうして平成



遊休施設を利用した「心のきない本の家」外観（写真上）と、分類された「善意」による4万冊の蔵書（写真下）。

11年7月あらゆるジャンルを網羅し蔵書4万冊を集めた「全国ありがとつ文庫・ひのきない本の家」をオープンさせることができました。これらの取り組みが認められ、サラダハウスは平成11年度の自治大臣表彰（地域づくり団体の部）を受賞しました。この運動は始まったばかり、分類作業も地道ですが、これから残り20万冊の本を順次文庫に並べていく予定です。今後住民・行政の支援のもと、最終的には本館の建設を目指したいと、取り組みに意欲的です。